

生涯スポーツの実践に向けた中学校運動部活動におけるソフトテニス部のあり方

A study on the ideal existence of sport club in junior high school for the sake of lifelong sport.

1K10C131-2 川尻鈴ノ介

主査 吉永武史 先生

副査 宮崎正己 先生

【研究の動機及び目的】

近年の中学校運動部活動(以下、「部活動」と略す)においては、ソフトテニスは男女問わず著しい人気を誇っている。その数は平成25年度でおよそ37万人とされ、どの部活動の総数をとっても最多であるとの報告がなされている((財)中学校体育連盟 HP,「加盟生徒数」より)。しかし、中学時代にソフトテニス部で経験を積んだものの、高校、大学、社会人となるにつれて、ソフトテニス離れが生じている現状がある。

その背景には、ソフトテニスに対するイメージや人間関係などが関係すると思われるが、一番には部活動のあり方に何らかの問題点があるのではないかと思われる。

私自身、6歳から現在に至るまでの16年間ソフトテニスに親しみ、ソフトテニスを通して多くのことを経験してきた一人として、生徒たちが中学校のみならず生涯を通してソフトテニスに親しむことができるようなソフトテニス部のあり方について提言をしていきたいと考えた。

したがって本研究では、生涯にわたってソフトテニスを親しむ態度を育むことを目指した中学校部活動ソフトテニス部のあり方を検討していくことを目的とした。

【概要】

第1章においては、ソフトテニスの誕生と普及発展の経緯を明確にし、運動部活動の誕生と意義についても検討した。同時に部活動ソフトテニス部の意義についても明らかにし、今日におけるソフトテニスの部活動としての価値・可能性について検討した。部活動における意義については、以下の通りである。

- ① 喜び・楽しさの場である
- ② 生涯にわたってスポーツをしていこうとする態度を育成することができる
- ③ 体力的な側面、健康の保持増進においても効果が見込まれる
- ④ 責任の自覚、協調性の構築、対人コミュニケーション能力の向上など人間的な成長も期待できる

(文部科学省 HP,「運動部活動のあり方に関する調査研究報告」より)

ソフトテニスは日本で生まれ、また坪井玄道によって高等師範学校で学ぶ学生たちに教授され、全国へと広まっていった背景がある。ソフトテニスの古い歴史と競技特性、また安全性の面からも部活動として大いに期待で

きる((財)日本ソフトテニス連盟,1995,pp.9-14)。

第2章においては、中学校運動部活動におけるソフトテニス部の生徒数の現状を明らかにし、高等学校における実施生徒数との比較によって、ソフトテニス部の生徒数の動向を確認した。加えて、2009(平成21)年9月に(財)日本ソフトテニス連盟が独自に調査を行った「ソフトテニスの普及(中・高校生)に関わるアンケート」を参考に、課題を抽出した。

中学校において一番の生徒数を誇るソフトテニス部ではあるが、その後の高校進学後においても継続すると回答したものは3割程度であった。制度上の問題や指導の問題によって、高校進学後もソフトテニスを継続できない、また継続しない現状が伺えた。課題をまとめると以下の通りである。

- ① 高校進学後のソフトテニス離れに関する課題
- ② 指導に関する課題
- ③ 指導者の確保に関する課題
- ④ 大会機会に関する課題

第3章においては、上記課題の解決に向けて、楽しい部活動に着目した指導のあり方、指導者の確保、大会参加機会の拡大の3つの視点から提案を行った。

楽しい部活動とは、有能感を与える部活動であり、指導にあたっては、有能感を促すことが重要である(杉原ほか,2011,p.67)。ソフトテニスの楽しさを広げ、内発的動機づけのもとで活動することで、中学校卒業後も継続してソフトテニスを行っていく態度の育成にも効果があると考えた。

指導者の確保については様々な問題が挙げられるが、生徒の期待やニーズにあった部活動を実現することに重きをおき、連盟や都道府県、市町村レベルでの外部指導員の確保のための取り組みがなされるべきであるとした。また、指導者を確保することで、中学校と同様に高校においてもソフトテニスを続けることができる環境づくりを期待した。

最後に、リーグ戦の創出について、非常に限られた大会の中で乏しい経験を積むだけで終わってしまう部活動からの脱却を目指し、能力別・年齢別のリーグ戦の創出を通して生徒の大会参加を現状以上に広げていくこと、さらには、有能感や成功体験を促す試合機会の拡大を通してソフトテニスに親しむことを目的に提案した。